

# 赤光

1970年

5月12日号外

毎月2日、12日、22日発行  
半年800円 年1,500円(含送料)  
定価 1部 1円

編集人 日本マルクス・レーニン主義者同盟  
中央委員会・機関紙編集部 東編 殿  
発行所 東京都千代田区飯田橋2・8・4(豊栄会館)  
レボルシオン社  
電話 (03-264) 0677 振替東京80708

## 人民総武装で6月決戦へ

**米帝のカンボジア反革命軍事介入弾劾！日米共同声明粉砕！沖繩返還！併合粉砕！**  
**安保破棄・佐藤内閣打倒の旗をかかげ、人民総武装の六月決戦へ進軍せよ**

アメリカ帝国主義のカンボジア軍事反革命介入弾劾！世界の野蛮な支配者を自認するアメリカは、今再びアジア侵略の無期限的拡大の道を、滅亡の道を一直線に進み始めた。全世界人民は団結して決起し、アメリカ帝国主義を始めとした帝国主義と世界の反動的支配者たちを弾き去らねばならない。

ベトナム人民の英雄的な死闘は、巨大・無敵な支配者とされたアメリカ帝国主義を打ち破り、危機に陥し入れ、全世界人民に帝国主義打倒の英雄的決起を呼びかけた。カンボジア人民は、帝国主義のカイライ打倒の闘いに決起、ベトナム人民を先頭とした全インドシナの団結を強化し、広大な戦線を形成した。

労働者・学生・市民諸君！六月決戦に決起し、インドシナ人民に続こう！  
佐藤政府、日米共同声明、沖繩併合、アジアカンボジア反革命介入粉砕！

佐藤政府！日本帝国主義は、日米共同声明に基づく沖繩併合に力を得て、アジアの戦争(革命と反革命の)に、ここぞとばかりおどろ出し、アジア会議に飛びつき、アメリカの反革命介入に手を貸し、「アジアはおれのもの」とばかり、侵略政策を拡大している。沖繩返還！併合は、支配階級の領土拡大の欲望以外でなく、軍事基地を強化する政策それ以外では決していない。百万沖繩人民は引き続き帝国主義の差別支配の下にしか置かれようとはしていない。六月決戦に総決起し、沖繩とアジアへの植民地的支配を粉砕しよう！

安保！共同声明粉砕の大決起を！  
総武装の決起で、佐藤内閣打倒の六月決戦に勝利しよう！  
アメリカ帝国主義への闘いは、インドシナから全世界へ、アメリカの学生の英雄的戦闘へと広まっている。日本労働者人民は、「日帝打倒・アジア革命勝利」の旗をかかげ、六月決戦に決起し、今こそ全世界の闘いに合流しよう。

佐藤内閣は、われわれの決起に対して、十一月決戦と同じように、「安保非常体制」をもって、機動隊を差し向け、警察国家的に弾圧せんとしている。労働者・学生・市民諸君！機動隊の暴力規制を打ち破り、佐藤内閣を打倒しよう！

**全国全共闘全国中央総決起集会**

五月二十一日 午前十時 日比谷野外音楽堂

**全国学生解放戦線臨時第三回大会**

五月二十日 午前十時

**労働者解放戦線全国総決起集会**

五月二十三日 午後六時 牛込公会堂

# 六月決 人民総武装六月決戦に 総決起せよ!

全国の労働者、学生、農民、市民の戦士諸君、権取と権臣、権威と支配のない新しい人民の社会をつくらせようとい夜奮闘している日本各界各層の兄弟たち、情勢は急を告げている。アジアを焦点とした国際帝国主義と人民大衆の対決、侵略・反革命戦争の政府は、日本を擁護がし、世界を擁護がしている。白米西國の帝國主義同盟を阻むうち砕けアシア人民の闘争、アシア人民の國際統一戦線は激烈で持久的な階級闘争、階級戦線へと成長した。

アメリカ帝國主義はベトナム反革命戦争をインドシナ全境に拡大し、日本帝國主義も日本共同声明にもとづく反革命早急をくり広げている。それにもかかわらず、人民は必ず勝利する。ベトナム・インドシナ革命の勝利は疑いない。朝鮮・中国、全アジア人民が共同した、帝國主義と植民地主義を打倒する解放闘争の勝利は疑いない。そして、アジア革命と日本革命は、この七〇年代において緊密に結びつき、世界社会主義革命の新しい時代を切り拓きつつある。

日本共同声明の発動、安保破壊一期限、「琉球処分」の再掲、七〇年六月の巨大大局面にあたり、その意を告げる情勢にあたり、日本M.L.同盟は学解放戦線を通じて人民総武装六月決戦を闘い抜くことを宣言する。日本共同声明粉碎・安保破壊・佐藤内閣打倒・人民総武装の大統一闘争を急ぎ進めよう。日本人はもう一九七〇年、全国津々浦々から、人民総武装六月決戦にむけて一斉に決起せよ。

## 日帝打倒、アジア革命勝利にもむけて

日本人とプロレタリア革命派は、左翼内閣成立以来、帝國主義者の密策した反革命をひたひた打ち破って前進をはかってきた。六七年から六九年までの二年間、敵階級は機動隊を総動員し戒厳体制を敷いたが、革命派の武装反力闘争は絶えず機動隊秩序をもくろみを叩

きつがして来た。それどころか、佐藤内閣は十一月決戦において、安保粉碎・沖繩解放闘争に決起した解放戦線軍団は全共闘、反動部隊、人民大衆を率い、その核心となり、安保非常体制を打ち破り十一月決戦勝利の地平を切り拓いた。日本M.L.同盟、解放戦線は幾多の犠牲を払いながら、能動的に情勢を切り拓き「革命の七〇年代」にむけて命がけの飛躍を大衆のなかに突き、すべての革命派を七〇年代の戦闘配置に呼びつけたのである。

この勝利の鍵は何であったのか。それは、四方八方から集中砲火を浴びせかけるブルジョア主義に対抗して鉄の団結を誇る革命の前衛、革命派の司令部、日本M.L.同盟が建設されたからであり、大衆路線を果敢に実行して武装闘争、宣伝工作をくり広げる解放戦線が革命派の導き手として確立されたからであり、そして、ボツダム主義体制を解体させ、社会の屈服と対決し抜く力を備えた全国全共闘、全国反戦先頭とするプロレタリア革命派の統一戦線が着実に前進を遂げたからである。人民の前衛、人民の軍隊、人民の統一戦線の三本柱をしっかりと固めることは、日本社会主義革命と人民大衆の解放に必ず勝利の展望を与える。

「革命の七〇年代へ」——アシアは烈火のごとく燃えあがっている。國際帝國主義の頭目、アメリカ帝國主義と復讐した日本帝國主義の侵略・反革命の同盟はアシア人民をますます固く結束させ、人民戦争を勝利に導き、帝國主義の崩壊を早め、社会主義の勝利を全世界化するにむけて進んでいる。佐藤・ニクソンのとり交した日本共同声明は、日本、沖繩人民の徹底した反戦にさらされているのみならず、インドシナ三国、朝鮮、中国、全アジア人民の激しい攻撃の的となつてきた。日本帝國主義同盟を打ち倒す敵としてアシアの規模の統一戦線が形成され、その革命運動が合流し、日帝打倒・アシア革命勝利の大河を突き進む時代が、その光栄ある時代がわれわれは生きているのである。

## 沖繩の帝國主義的 処分——併合粉碎

五二年発効のサンフランシスコ条約と六〇年改訂の安保条約によつて、沖繩はアメリカ帝國主義の軍事的・植民地的支配を運命づけられた。明治初頭以来、日本帝國主義は一貫して沖繩人民を圧迫し差別し、軍事的・植民地支配のものと隣隔してきた。第二次大戦後、アメリカ帝國主義のアシア防衛戦略のために不沈空母として利用されてきた沖繩は、いままた日本帝國主義者の間で人民主権を無視した取引の具となつてしまつてしまつた。

十年間の安保条約期限を六月にひかえ、政府支配階級は佐藤内閣の手で、無期限延長を画策したのみならず、日米共同声明を発表させ、沖繩人民の憲法・主権に反して帝國主義的処分——併合を断行しようとする。離地・漁場をとりつぎ、永久に「基地・観光の島」「軍事要港」「化学・日本帝國主義者のついでこぞ、七〇年代沖繩返還」の本質である。百年にわたる帝國主義者の軍事的・植民地的支配を今後とも許さずどうか、日本と沖繩人民の本格的な試練が始まった。

日本ブルジョアの大國の民族主義排斥主義の攻勢をいかりと見抜き、日本帝國主義の「大東亜共栄圏」再現の野望を打ち砕くには、とりわけ沖繩解放闘争にむける激闘な態度が必要とされる。沖繩人民が自ら頭上をいじりまわす帝國主義のいかりを許さず、軍事的・植民地的支配を許さず、「島へるみ闘争」を貫いて人民の解放へとむけて発展させていこう。われわれは全面的に支持し、日本帝國主義の沖繩支配干渉に反対する。佐藤内閣が日本防衛委員会返還準備委員会を通じて策動している沖繩の帝國主義的処分に断固として反対する。日本の革命派はなによりもまた、沖繩人民が期待し望む解放の道にたどり着くまで、日本帝國主義を撃退しなければならぬ。

このようにわれわれが闘い抜くならば、われわれは、人民総武装六月決戦に必ず勝利し、日本社会主義革命とアシア革命の勝利に向けてたゆまざる前進・飛躍をかきすすんで進んでいく。六月決戦から逃げるものは、帝國主義に服従し屈辱するものである。日本共同声明粉碎・安保破壊・佐藤内閣打倒・人民総武装六月決戦に決起せよ、日本M.L.同盟解放戦線の旗のもとに結集せよ。

## 佐藤内閣打倒・人民総武装六月決戦

アメリカ帝國主義の断末魔にあつた、インドシナ反革命戦争は、佐藤内閣を「屠殺」・反革命にかりたてている。しかも佐藤内閣の強権的政治支配はいたるところで人民に犠牲を転嫁し、人民の生活を破壊し、人民の不満をうっ積させ、巨大大衆の抵抗と反戦に出会っている。日本経済の「高度成長」がもたらしたものは、財閥と官僚の独占的、國權的支配であり、戒厳体制をとり、機動隊秩序をつくりあげ、自衛隊の治安活動を進めつてはきたが、六〇年代末から七〇年代にかけて、日本人と革命派は、激烈な、持続的な戦闘を果敢に展開し、帝國主義者の威信を叩きつぶさつてきた。学生に対する虐殺・処分・ロケットの攻撃も、高校生に対する政治活動禁止も、労働者に対する政治処分も、次から次へと打ち破られ、巨大大衆の叛乱が開始されている。十一月決戦を受け継いで、七〇年春夏大攻勢をうごめいた解放戦線は、日大古田さしむけの右翼暴力団の中村克己同志暗殺にむちひしがれず、四・二八沖繩解放闘争を全国各地で領導した。

十一月決戦から革命の司令部、軍団、統一戦線の堅い結束が、そのみが、勝利の力であることをわれわれは学びとった。この大道から迷わず進んでいこう。敵階級の痛打を浴びた。六月決戦を前に、動搖、懐疑を返すことは許されない。アメリカ帝國主義のカンボジア革命軍事介入は海に彼等の墓穴を掘るに等しい。そして、佐藤内閣のアシアとの協同も同様である。日本人と革命派は敵階級が侵略・反革命に敵すれば徹すほど、いよいよ決意を固め、主动性を發揮して、彼等を撃つために能動的に闘い抜いていこう。

われわれは、人民総武装六月決戦に必ず勝利し、日本社会主義革命とアシア革命の勝利に向けてたゆまざる前進・飛躍をかきすすんで進んでいく。六月決戦から逃げるものは、帝國主義に服従し屈辱するものである。日本共同声明粉碎・安保破壊・佐藤内閣打倒・人民総武装六月決戦に決起せよ、日本M.L.同盟解放戦線の旗のもとに結集せよ。